The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>藤田治彦『現代デザイン論』
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 1999, 38, p. 96-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤田治彦『現代デザイン論』

昭和堂　1999年　237ページ

羽生　清／京都芸術短期大学

最初読んだ印象は，グローバルな時代だからこそ，このように日本の，そして関西の歴史と遺産に目配りした『現代デザイン論』が書かれる必然があったのだという想いであった。身近な人名や建物が読書に弾みをつけてくれ，東京一極集中の日本におけるこれまでの書物にはない，味わいを感じた。

そして，今回，書評を書くにあたって読み直し，その想いを更に強くした。デザインの問題は，それぞれが問うべき生活のなかにあり，どこかで作られたデザインをコピーすれば良いといったものではないということが，はっきりとしてきたからである。

そのように「現代デザイン」を捉えようとするとき，私たちは明治維新以後の近代化のなかで，かつてこの国にあった形の何を残し，何を変えてきたかについて検証してみる必要がある。デザインとは良い意味でも，悪い意味でも，それぞれの近代国家成立の状況と緊密に関わってきた。現代において自己決定に責任を持つ市民としての生き方は，歴史に対する正確な認識なしには成立しない。

本書には，デザインを読み解く四つの視点「産業」「生活」「情報」「環境」が用意されている。この軸は，現代デザインを考える上で至当な選択といえる。豊富な史料を生かすのは四つの枠組みで明快になったデザインの領域と歴史が読者の脳裡で整理されるからである。労作の意味を取り違える危険を犯す覚悟で敢えて本書の内容をまとめ始めたとき，この書物が懐深く，読み手それぞれの関心に合わせて読み進めることに気づいた。

近代日本のデザインは，明治政府の富国強兵策とともに発展してきた事実は疑いようがない。「産業芸術としてのデザイン」のいち早い導入を可能にしたのは，寺子屋などの普及による民度の高さや幕府の殖産興業の遺産もあったであろうが，なにより，国内情勢も定まらない明治四年，早くも岩倉使節団を組織し海外を視察した新政府の心意気であった。その年，オーストリア政府はウィーン万国博覧会への参加を求め，工芸の志士たちのひとり，納富介次郎は，明治六年，日本政府が初めて参加する万博の技術官に選ばれ，博覧会を通して美術工芸品が輸出品になりうることを確認し，工芸立国を志す。教育が国の未来を決めると考えた政府は近代教育制度の確立に勤め，デザイン教育の場は近代技術の導入とともに，美術工芸から実業工学まで，さまざまに変った。工芸，工業，意匠，図案といった言葉が，時代の試行錯誤をそのまま表している。二ケ月で終わった東京大学工芸学部などはその典型的な例であろう。幕臣から新政府の官僚さらにジャーナリストとして名を馳せた福地櫻痴や近代洋画の祖である高橋由一などが組織した意匠会において，形状や文様，彩色を超えてある妙味を意匠の力として研究していたという。意匠という言葉には，まことに深い含蓄がある。

産業立国のための国策中心であった明治が大正に変わると，近代化が市民の生活と結びつく。「生活芸術としてのデザイン」が洋風化に取りくみ，和洋折衷の住まいが生まれ，「二重生活」がひとつのスタイルを作り出す。大正九年に和を取るか，洋を採るかという論議ではなく，「二重生活の醇化」を唱えた長

谷川真治の言葉は，興味深い。「結局『醇化』はおこらず，洋風化のみが進行したともいえるだろうが，玄関で靴を脱ぐことに代表されるように，日本人の生活が完全に洋風化されたわけではない」と著者が語り，挿入された設計図が住空間の変化についての理解を助ける。生活改善は住から衣へと広がった。簡便を意図したはずが却って煩雑になり，必然性のない装飾が奇異に映る梶田半古新案改良服は，デザインの意味を逆説的に呈示しているように思われる。自由で創造的な生活の可能性に対する模索は，市民の側からの新しい教育，自由学園や文化学院を生み，同時代の官立学校以上に大正モダニズムを具現していた。民芸運動や農民芸術運動などの多彩な動きも忘れられない。

「情報芸術としてのデザイン」では，産業と生活とを結んださまざまなメディアが登場する。近代日本形成期最大の情報メディアは新聞であり，絵入りのそれが今日の私たちに開花の時代を伝えている。商品販売促進のため制作された北野恒富や杉浦非水などのポスターは，百貨店を中心とする消費を拡大し，そこから海外のライフ・スタイルが上流階級に取りこまれて行く。華やかな生活情報のうらで，軍に統制された情報が日本を戦争へと駆り立て，デザインの戦争責任という大きな問題が残る。国際的であることと地域的であること，デザインの課題は，そのまま海外への野望を持った昭和初めの日本と重なっていた。しかし，なかには，インターナショナルな視点でリージョナリズムへ向かう「狭義の国民性に固執せず真正なる『ローカリテイ』に根底を置こう」としたエスペランティスト，京都高等工芸学校教授本野精吾の発言も存在した。昭和という時代は，戦争と復興に明け暮れた。我国が欧米のデザインに席巻されたように，我が国のデザインがアジアを席巻する可能性，軍部が試みて果たせなかった夢を戦後，軍備を放棄した日本が果たすことになるのは皮肉である。コンピュータを駆使せずには動かなくなった世界は，国境を超えて人間と機械とが向き合う。機械と親密にはなったけれど人間には疎遠になってしまうことになりかねない。「人間と人間とのインターフェイスに異常を生じさせるようなマン・マシン・システムのデザインならないほうがいい」という著者の言葉にほっとする。

平成から明日の「環境芸術としてのデザイン」は，私たちに倫理的責任を問う。デザインは，美的である以前に，何より安全であることが要求されているのである。戦災，天災を経験した日本のこれからのデザインを語る著者の迫力の幾分かは，地震体験に因っているかもしれない。トルコや台湾の地震は，風土と歴史を忘れた近代化が起こした人災の様相を明らかにした。責任の不在を嘆いてばかりはおれない。環境からデザインを捉え直そうとする著者は，もう一度，手作りの意味について考える。「手でつくる」ことから「みずからつくる」ことへアーツ・アンド・クラフツ運動の力点を移し，それを産業革命後の英国にあったもう二つの運動と共に再構築する可能性を示唆する。ソーシャル・セツルメントという改良の望まれる地域に実際に移り住んで行う社会運動とナショナル・トラストに代表される環境保護運動と共に。重い問題提起が明快な論調で語られているのが本書の特徴である。

公平な視点で書かれたこの書物から，読者はそれぞれの「現代デザイン論」を展開することが可能だ。この書物を読んで，私は，私の「現代デザイン論」に想いを馳せた。工芸繊維大学で学び，松下電器産業株式会社で「Gマーク展」の搬出入で出張した時代から，今日の意匠学会活動まで，私的な生活がその

ままこの書物の出来事と関わる。同時に，男性である著者と女性である私は，同じ事態を同じには体験できないという当然の事実にも出会う。現代デザインへの必然性を読みとることのできる書物に出会えた喜びとともに読み進みながら，何故か私の想いは，いつも切り捨てられてしまった側に傾斜していた。毎日の買い物やゴミ捨て，生活のなかでのリサイクルに心しながら，子育て真最中にエコロジー論議の沸騰していなかったことに胸をなでおろしていたりする。使い捨てしないためには時間と労力が要る。日本の現代史は，そして現代のデザインは，それぞれが属する性や集団によって，随分異なったものになると思う。

それぞれのデザイン論を展開してゆく際に指針となる正確で親切な書物，豊富な資料を大きな問題意識で取りまとめた『現代デザイン論』が誕生したことを喜びたい。本学会員である著者はこれまで欧米を対象とした興味深い研究発表を重ね，そのような博学に裏付けられた我国，我地域のデザイン論であることが嬉しい。本学会が，かつて関西意匠学会という名称であったことを懐かしく想い出した。